
先輩と僕

送り狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩と僕

【Nコード】

N8171X

【作者名】

送り狗

【あらすじ】

「先輩は可愛い。先輩は優しい。先輩は可憐だ。先輩は天然。先輩は泣き虫。先輩は同情する。先輩は天真爛漫。先輩はマイペース。先輩は頭脳明晰、運動音痴。先輩は……バカだ」「フツ！僕に先輩を語らすならばこんなものじゃ済まない。出直してきな！」（以上、先輩に異常な執着を燃やす、2年1組の〇〇君の直撃インタビューでした） 今のような話です。

暇な僕（前書き）

女の子と2人っきりの部屋で僕は何をすればいいのだろうか？ 可愛
い先輩をからかうのか、空気に耐え切れずに助けを呼ぶのか。僕は
逃げ出さない。

なぜなら……先輩をからかうのは僕1人で十分だから！

暇な僕

どこかの高校の、どこかの部室で、先輩と僕のなにげない会話が始まる。

4時35分。もうすぐ5時になる。今、僕はとても暇だった。どれくらい暇なのか例えるなら、校長先生の挨拶くらい暇だ。

(はぁ……暇だ。何か面白いものはないかなー あっ、先輩発見！)

クルツと首を動かし部室の中を見回すと、僕のすぐ近くだけど、決して近くも遠くもない距離に先輩がいた。

今日も先輩は、お決まりのように本を読んでいる。

「ねえ先輩、バナナって10回言ってみてください」

「ん？ なんで？」

本を読んでいた先輩は、本から顔を上げると首を傾げている。

「いいから、きつと面白いですよ」

「そうかなー じゃあ、バナナバナナバナナ……バナナ。はい、言ったよ」

素直に言ってくれる先輩。可愛いです！

「先輩は？」

「バナナ！」

予想以上に可愛い先輩。これはもうからかうしかない。

「わーい 先輩バナナー！」

「なっ！？」

僕にそう言われると、自分の言い間違えに気がついたのか、先輩は顔が真っ赤になり慌てだした。

「や、やめなさい！ わたしはこれでも君の先輩なのよっ」

「えー 自分のことをバナナと言ってしまっ先輩には、どうにも説得力がありませんね」

僕が返した言葉のほうの説得力があったようで、先輩は押し黙ってしまう。

(わっ、ちょっとやり過ぎてしまったかな？)

「す、すみません。少し言葉がきつかったかもしれませんが」

僕は少し言いすぎてしまったと、先輩に謝った。

「せ、先輩？」

しばらく経っても返事が来ない。僕が心配を شدしたころ、先輩がようやく喋ってくれた。

「わ……………わたしは……………バナナじゃない……………
もん……………」

下を向いていた先輩はゆっくりと僕を見上げると、赤面した顔のまま僕にそう言った。先輩と一緒にいるといつも思っていたが、今日はいつにも増して思ってしまった。

(先輩可愛い　っ!!!!)

暇な僕（後書き）

一話完結のショートな話です。

感想など書いてくれると嬉しいです。

驚く先輩（前書き）

驚いた先輩と僕の話

驚く先輩

「きゃああああ　　！！！！」

僕と先輩しかいない部室。先輩はいつもどおり本を読み、僕は惰眠をむさぼる。そうして過ごしていた僕は先輩の悲鳴で目が覚めた。

「ぬうお！？　どっどっしたんですか先輩！？」

「くっ黒いものがっ！？　わたしの足元を黒いものがっ！！」

「黒いもの？　動いて黒いもの？　それってゴキ……………」その名前を言わないでっ！！」「……………」

僕が首をかしげながらその名前を口に出そうとすると、先輩が必死になって遮ってきた。

「黒いもの　例のあのヒトがあ！！　なんとかしてよ君。^{きみ}男の子でしょ！！」

「っ！？」

今日の先輩は混乱していた。混乱した先輩はそのまま訳の分からないことを口にします。

「例のあのヒトがいたっていう事は、ここにはもつと居るっていうわけで……………部費でホイホイを100個くらい買わないとお」

「せつ先輩！　そんなに置いたら足の踏み場もなくなりますよっ！

それに今居るのは一匹です。それさえ退治すればいいじゃないですか!？」

「その名前を言わないでっ!?!」

「名前言つてませんよ!?!」

しかし、怯えている先輩もまた可愛いが、いつものように明るい先輩が一番可愛い。

先輩を怯えさせるなんて……これは僕がゴキ……
『言わないでー!?!』……例のあのヒトを退治するしかない!

「先輩は廊下に出ていてください。ここは僕が何とかしますんで」

「わっ分かったあ……」

そう言うと、先輩は廊下に出ていく。扉が完全に閉まるのを確認すると僕は行動を開始する。

「先輩を怯えさせるヤツは僕が許さない。さて　　覚悟するんだね」

それから僕は、『てやあ、はあっ』と、例のあのヒトに苦戦し、勝利する。

「先輩、もう危険がなくなりました。安心して入ってきてください」

「そっ?」

扉からチヨコンと顔を出した先輩は中を覗くと、そろそろと入ってくる。

「ほら見てください。ヤツはいなくなりましたよ」

僕は両手を広げて部屋が安心なのを先輩に見せる。その様子を見て、ホッと一安心した先輩の目に何か黒いものが写ったらしい。

「きゃああああ　　！！！！」

そうして本日2回目の、僕の戦争が始まった。

驚く先輩（後書き）

その後先輩は怯えてしまって、3日ほど部屋に寄り付かなくなってしまった。

えんぴつと僕（前書き）

えんぴつを語る僕と先輩のお話

えんぴつと僕

『カリカリカリカリ……カリカリカリ』

先輩と僕の、2人しかいない部室で、えんぴつが紙の上を滑る音しか聞こえてこない。

今日の授業でたつぷりと出されたレポート相手に格闘していたとき、左手に持ったえんぴつを見て、僕は唐突に思った。

「先輩、えんぴつって使ったことがありますか？」

窓枠に寝そべってひなたぼっこをしていた先輩は、僕の突然の質問にのんびりとした口調で答えてくれる。

「バカにしないでよ君。^{きみ}わたしはこれでも小学校6年生まで使っていたんだから！」

「小学校6年生までですかあ」

「先輩って、小学校6年生の頃から可愛かったんでしょうね。あーあ、小学6年生の先輩が見たいなー」

僕がそう言ってしまったときにはもう遅く、先輩は熟れたトマトみたいに真っ赤になると、『そっそんなことなんもんっ』と、大変可愛らしかった。

実際のところ、僕は狙ってそう言ったのだけど。

「先輩。話は戻りますが、僕は今でもこうしてえんぴつを使っているわけですが、なぜだと思えますか？」

まだ顔が真っ赤のままの先輩に、僕は尋ねる。

「うえ？ えっえーと……わからないよ」

「そうですか……」

僕は先輩に分らないと言われたことが意外とショックだった。なんだらう？ この胸がズキズキする痛みは？

「まっまあ気を取り直して続きですが、僕はえんぴつが一番使いやすいと思うているんですよ」

「自分で削り、お好みの使いやすさにする事も出来る便利さ。芯の濃さや太さにも多様なバリエーションがあり、どんな場面でも活躍してくれること間違いなし！」

「そして極めつけは、小さくなったえんぴつの愛らしさ！ 小さくなってくると、そのえんぴつにも愛着が湧いてきますし、なんとなくキャップをつければ最後まで使えます！」

「まあ本当に小さくなってしまったえんぴつは、捨ててしまうのですが……」

「そして 捨てる時に物語が発生する！ 今まで使ってきたえんぴつを手放してしまうという罪悪感。しかし、新しくえんぴつ

を使ってしまいたいという好奇心。なんてえんびつは罪な存在なん
でしょう！！」

「で、僕がえんびつのことについて何を言いたいかと言うことです
が・・・・・えっあれっ先輩？ 先輩！？」

先輩は、僕が語るえんびつ愛についていけずに、脱落したようでし
た。

えんぴつと僕（後書き）

せんぱ

いっ！！

カムバアアア

クッ！！！！

おしくらまんじゅうと先輩（前書き）

おしくらまんじゅうがしたい先輩と僕の話

おしくらまんじゅうと先輩

「…………おしくらまんじゅうがしたいなあー」

僕は部室でマンガを読んでいたとき、先輩が何の前触れもなくそう言っていた。

そんなわけで、思いつきり不意をつかれた僕は、「はいっ!？」と、素で返してしまう。

「なんて声を出しているの君^{きみ}。おしくらまんじゅうだよ、おしくらまんじゅう! きつと楽しいはずだよ」

「あーちょっと待って下さい。おしくらまんじゅうは分かりますし、楽しいのも分かります。でも　なんで今?」

「おしくらまんじゅうをしたことがあるの!？」

「????　何ですか先輩?」

先輩が何かを言ったようだが、早口でうまく聞き取れなかった。

「えっ?　いやあ…………それはそのお……………そっそう、昔を懐かしんでいたら、急にやってみたくなっただけだよ」

「いや先輩、今何か言いかけてませんでしたか?」

誤魔化そうとする先輩に追求してみる。

「何も言っていないっ!!」

「はいっそうですねっ!!」

誤魔化されました。

しかし……このように言ってなにか必死に誤魔化そうとする先輩。

しかし先輩！ 僕は見ていました。先輩がさっきまで読んでいた本の内容が青春モノで、その中におしくらまんじゅうが出てくることをっ！

「安心してください先輩っ！ 僕はさっきまで先輩が読んでいた本の内容に、おしくらまんじゅうが出てくることなんか誰にも言いませんからっ！」

「ああっ!?!」

先輩は顔を押さえながら、走って出て行ってしまいました。

おしくらまんじゅうと先輩（後書き）

この後先輩を捜しに言った僕は、先輩にポカポカと叩かれました・
・
・
・

自販機と僕（前書き）

自販機について語る僕と先輩の話

自販機と僕

僕と先輩がいつも部活をしている部室には、自販機がある。

部屋の作りはどこの文化部の部室とも変わらない。特別な場所に部室があるわけでも、無理を言って設置してもらっているわけでもない。

でもなぜか、自販機が部室についている。

その自販機は今でも機能している。というか、一日一回は業者が来て補充までしている。ごくろうさま。

自販機の中身も、お汁粉などオーソドックスなものから、今流行の炭酸飲料まで各種取り揃え。非情に充実した自販機である。

その自販機の需要はあるか？ ない。

その自販機を使っているのは、先輩か僕か、隣や同じ校舎で部活をしている生徒だけである。まったくもってお金の無駄使いだ。

でも、先輩と僕はかなり重宝しているので、大事に思っている。

一度先輩に聞いたことがある。なんで部室に自販機があるんですかって。

先輩は、

「わからない」

と、言っていた。そして、その後続くように、

「わたしも昔気になって、一度先輩に聞いたことがあるんだけど、分からないんだって」

「わたしが聞いた先輩が言うには、その先輩も入学してすぐに先輩に聞いたらしいんだけど、分からないって。その先輩も、そのまた先輩も、そのまたまた先輩も知らないって聞いたよ」

「そしてわたしが思っていることなんだけど、この自販機にはすごい秘密が隠されていて、その秘密はきつと国家レベルで守られているんだよ！」

と、久しぶりに先輩が熱弁をふるっていた。僕は「そんなまさかあー」と言っていたが、もしそんな陰謀が隠されていたらどうしようと思ひ悩んだこともあったが、考えても仕方がないことに分類して思考を停止した。

しかし……僕が尊敬してやまない先輩は天然で、ちょっとふわふわしてみている危ないのだが、勘ばっかりはものすごく良く、本当に心配している。

まあ今日は独り言をべらべらと喋っていたが、何が言いたかったのかというと、先輩は天然でふわふわしていて勘が良いということだ。

自販機と僕（後書き）

ちなみに僕と先輩がいる部室は、倒れてくる本棚で自販機が隠れているので、使用には注意が必要である

購買部戦争と先輩（前書き）

購買部戦争に挑む僕と先輩の話

購買部戦争と先輩

昼休み　　朝、お昼ご飯を作り忘れてきた僕は購買部に来ていた。

聞いた話だけれど、うちの高校の購買部はお昼休みは大変混雑すると聞いている。僕は今まで購買部に足を運んだことが無かったので、いい機会だ。その大変混雑するという購買部を見ようじゃないかっ！

なんて軽い気持ちできていた僕は、この高校の購買部での混雑するという言葉の意味の、スケールの違いに驚いた。

「うっわああ　　なんだこれ!？」

そこはまさに戦争とでも表現したほうが当てはまる場所だった。

我さきに弁当や菓子パンに群がる学生たち。押し合いで一步も動くことができない状況。何よりすごかったのがその熱気だった。

「押すな押すなっ」

「おばちゃん！　コレくれっ!」

「おいっコレは俺が先に目をつけたんだ!」

離れた場所に居る僕のところまで届く、その熱気と声。見ているだけで熱かった。

少し様子を見てみると、僕のクラスにいる熱血君がいた。熱血君はこういう熱い雰囲気大好きなので、欠かさず昼飯争奪戦に参加しているのだろう。その証拠に、手際よく菓子パンを手に入れてはお金を払っている。

「おつ君^{きみ}じゃないか！ 珍しいなこんなところにいるなんて！」

さすが熱血君というべきか、喋り方まで熱い。そんな熱血君はチラツと購買部の方を見ると、珍しく戸惑ったような表情をしていた。

「君^{きみ}がいるってことは弁当を忘れたってことか？ 俺の菓子パンを分けてやるから教室にいかないか？」

「いやいや。それは熱血君のお昼ご飯だし、僕が貰うのはなんか悪い。気にしないで、僕は自分で買ってくるから」

そういつて僕は購買部のほうに向き直り、気がついた。

『先輩が売り子をしている』

僕はそれを見た瞬間、購買部に駆け出した。後ろから『あーあ』と言う声が聞こえてきたが、気のせいだろう。

「とつっ！」

どうやってか僕でも分からないが、おしくらまんじゅう状態の最後尾から僕はジャンプして最前列に降り立つ。周りの人は驚いている様子だったが僕は気にしない。驚いている先輩に向かって僕はお金

を払おうと口を開く。

「先輩を1人下さい！」

「100万円になります」

「……………100回払いの、ローンで」

今日は部屋にいないときの先輩を見て、失ったものは大きいが、満足したことは伝えておく。

購買部戦争と先輩（後書き）

100万円はもちろん冗談だし、僕は先輩のエプロン姿を見て鼻血ものだったが、肝心なお昼ご飯を忘れていた。

泣く泣く帰ってきた僕は、熱血君やクラスの子からお弁当を少しずつ分けてもらいました。

窓と僕（前書き）

イタズラな先輩と窓と僕の話

窓と僕

いつもの部室。いつもの時間。今日も先輩と僕は部室で思い思いの時間を過ごしていた。

平和という言葉以外見つからないくらいほのぼのとした空間。そんな空間で、僕は異彩を放っていた。

教室に置いてある机をいくつも並べ、ゴロゴロと寝転がっている。先輩と僕の2人しかいないため、目立っているが気にならない。そんな絶賛怠惰中の僕に、先輩が声をかけてきた。

「寒い〜っ!？ 君、窓を閉めてくれない？ 窓から入ってくる風が肌寒いから」

顔を上げて見れば、窓が開いており、まだ肌寒い季節だということも相まって、入ってくる風が冷たい。

「はい分かりました」

僕はそう言っで窓を閉める。

肌寒いこの季節、先輩に言われなくてもいずれ気が付き窓を閉めたと思う。しかし、

(先輩に言われて気が付くなんて末代までの恥だ……次からは先輩に言われる前に気が付かないと！)

そう決意して3分後、先輩から声をかけられた。

「暑い…… 君、窓開けてくれない？ なんか暑くなってきたから」

エアコン完備の我が部室、窓を閉めたついでにエアコンを入れたのだ。ちなみに28度設定。

はい、と言って窓を開ける僕。そして、エアコンの電源を消し、窓を少し開ける。

肌寒い風を感じながら数分後、先輩から窓を閉めてと言われる。そして数分後、窓を開けてと言われる。しばらくこんな事を繰り返すと……

「あゝっつっ！？ 君っ！！ 嫌がらせされてるんだから気が付きなさいっ！？」

「なっなんだつてええ！？」

手振り身振りのオーバーリアクションで驚くが 知っていました。そんな事とつくに知っていましたよ、先輩！

先輩のお茶目なイタズラは逆に萌えると気が付かないと、どれだけの男が犠牲になるか分からない。

僕は目頭が熱くなるのを感じながら、肌寒い空に敬礼をした。

窓と僕（後書き）

この後、先輩に変なことを吹き込んだ人を探しに行くことにした
続く！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8171x/>

先輩と僕

2011年11月21日20時05分発行